
短い話の集会所

藤田文人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短い話の集会所

【Nコード】

N9809A

【作者名】

藤田文人

【あらすじ】

一話完結のお話を中心の短編集です。中には詩の様なものも混ざってます。大半が短いので暇潰しにどうぞ。

癒しの丘

見上げれば、遙か遠くまで澄み渡る青。一点の曇りもない快晴の空。

見下ろせば、生命力溢れる緑の景色とそこに緩やかに流れる小川が見える。透明な液体が光を反射し目映い輝きを放っていた。

ゆつくりと、だが確実に永遠を刻む時の流れを連想させる。それらを見渡せる小高い丘の斜面に仰向けになり時の流れに身を任せる……それだけで恒久的に続く在り来たりな“日常”を忘れる事ができた。

この丘は都会の喧騒とは無縁だ。昔からの自然の姿がここにはある。

平たく言えば、何も無い場所。だが、何も無いという事は余計なものが無いという事でもある。

モノが溢れ、様々な情報が錯綜する混沌極まるデジタルな戦場の中を遮二無二駆け回る自分にとって、この“何も無い”という事がどれだけ心休まるか。

膨大な量の情報の波をかき分け、必要な情報を迅速に入手、さらに処理を施す日々……そこに人の営みなど無い。まるで自分も機械になった様な錯覚さえ感じる毎日は、さながら戦場の兵士の如く殺

伐とした心境にさせてくれる。

そこは心の拠り所さえを見失ってしまう世界なのだ。

ここに来るという事は……自分にとって『人間に還る』の同等の意味を為す。

ここに居ると時間の流れを気にせずに済む。景色が、帰る時を教えてくれるから。

ただ、空を見上げるも良し。

川を眺めるも良し。

横になって眠りにつくも良し。

原始的な時をただ過ごせば良い。

それが、何よりもかけがえのない癒しとなる。

雄大な自然の中をたった一人で居ること。

ここに居ると自分という人間がこの世界でいかに小さな存在であるかを再認識する事ができる。それが自分の抱える悩みやストレスがほんの些細なものであるという事も教えてくれるのだ。

——安らぎの時は短い。気持ちのゆとりを持てる時間は稀少だ。日が沈めば、また戻らねばならない。

生きるために人間らしさを脱ぎ、淡々と仕事をこなす日常に戻らねばならないのだ。

しかし、短い故にその癒しを強く実感する事ができる。

心の安らぎを感じる事ができる。

世界との繋がりも感じる事ができる。

それは、都会では決して味わえない感覚だ。何も無いから実感できるものだと思う。

——だから今は、この時を感じようと丘の斜面に身を投げ、果てしなく広がる空に思いを馳せよう。

空を舞う鳥達の姿を眺めよう。

それに飽きたら身を起こし、静かに流れゆく川のせせらぎを聞こう。

時折跳ねる魚の姿を眺めよう。

——それが、この丘の過ごし方なのだ。

紫煙

——煙草の煙が目にはみ入る。

度重なる煙草税の引き上げも何のその、愛煙家たる俺は財政難を物ともせず今日もまた煙草を買っている。

『煙草は麻薬と同じ』と聞いた事がある。

それは中毒性と体への害を鑑みれば、なんとなくだが理解できる。しかし、煙草は合法だ。麻薬なんかと一緒にしないでほしい。

たしかに煙によって周りの人にも害を及ぼす恐れがあるし、ただ単に煙を受け付けない人もいるので嫌がられるのはしょうがない。

昨今の煙草事情は愛煙家にとって極めて不利な状況だから、我々愛煙家は嫌煙家達の目の届かぬ場所で気を使いつつ紫煙を堪能しているのが現状である。

『わかっているけど止められない』

完全なニコチン中毒の常套句である。

煙草は、百害あつて一利なし。

誰もが知ってるこの言葉。だが、俺は敢えてこの言葉に反論する。俺にとって煙草は“心の清涼剤”と同義語である。

肺を真っ黒くするのに清涼もないが、ニコチンを摂取すると気分が落ち着く。まあ、これはただ単に中毒症状が改善される事によるものなんだが、とにかく吸わなきゃやってられない、というわけだ。吸わないと気分が落ち着かなくなるし、イライラしやすくなる…

…なんだが言つてて苦しくなってきた。
議論になつたら嫌煙家には勝てそうもない……。

『煙草と酒はゴールデンコンビ』

これ、定説。俺が煙草を吸いはじめたのもこの絶妙なコンビネーションに屈したからだ。

何故だろう。本気で美味しいのだ。

それまでの俺は、煙草の煙がダメで『煙草吸ってる奴は人間のクズだ』と愛煙家の友人を散々罵倒していた。

ところが、ほんの気まぐれで一本吸つてみたら……そんなに悪くなかったのだ。それがきっかけでチョコチョコ吸う様になり、気が付けば誰よりもヘビーな人間と化していた。

……ニコチン、恐るべし。

歴史に出てからあつという間に世界中に広がり、そしてその害が広く知られる様になってからもその勢いを衰える事ない煙草。

麻薬と同じというなら規制すればいいのに。合法だから止められないんだ、と自分の意志の弱さを棚上げにしたくなる。

『人の迷惑顧みず、至福の一服、紫煙の薫り』

毎日買うのでお金もかかるし、健康にも良くない。しかも周りにも害を与える。近頃、世間はやけに嫌煙化して喫煙者の肩身は狭くなる一方だ。

これは、ある意味仕方ないかもしれない。

俺の周りでは、胎児に悪い影響を与える、という事で子供ができて煙草を止める友人が増えている。無論、その意見には俺も賛同の立場を取っている。

生まれてくる赤ん坊に不幸は背負わせたくないから。

しかし、俺はまだ子供がない。故にまだ煙草を止める気にはならない。

たとえ後々後悔する時が来ようと、習慣となった喫煙は治らないだろう。

——煙草の煙が目にはみ入る。心と体にもしみ込んでいく。

弱者の戯れ言（前書き）

この作品は短編で投稿したものでしたが、こちらに掲載するため削除しました。

なお、加筆修正はしてませんので、その点のところはご了承ください
m (——) m

弱者の戯れ言

『僕は、とても弱い人間だ』

僕は弱い。

僕は臆病だ。

僕はすべてを拒絶する。

うまくいかない人生に対し、僕は最も卑劣な手段で反抗する。

『ひきこもり』

僕は外界との接触を断つ事で張り詰めた緊張と沸き上がる不安を封じ込める。

……深い理由など無い。ただ“そう思う”事が事実だ。

何が原因なのか、何が僕を変えたのか……言葉に表せるほど僕の闇は単純ではない。

味気ない現実。

造られた幸福。

飾られた愛情。

……気付いた時には手遅れだった。

僕の中で“何か”が崩壊し、すべてがモノクロの情景と化した。失意と絶望。

今、僕の心の大半を占める二つの思いが僕の心に怒りの炎を燃え上がらせる。

醜い感情に支配され、繋がりを放棄するのに時間は掛からない。

理解も無く、押しつけの常識でしか計る事のできない大人達に僕の闇は取り除けない。

この苦しみと悲しみ、そして寂しさを癒す者は現れるのか。

唯一、僕の自由を肯定してくれる狭い部屋の中で、僕は電脳世界の住人に救いを求め放浪する。

真実と虚実が交差する平面世界で、果たして心が瓦解した僕を救い出す者が現れるのか。それとも、残酷なまでの“現実”の名の下に僕の価値を否定するのか。

……僕は今日もまた電脳世界へ旅立つ。決して癒される事が無いとわかっていても僕は答えを求めて放浪する。

『僕の心は妬みの塊だ。』

僕の心は複雑だ。

愛すべき人に素直になれない。愛おしさが強すぎて憎しみに変化する。

愛しくて、愛しくて、でも自分のモノにはならなくて。その切なさか嫉妬を呼び、嫉妬は憎悪へと変貌する。

どんなに望んでも手に入らない心。

その優しさも温もりも手に入られるのに……最も欲するべく“愛”を手にする事はできない。

愛すべき人。

尊敬すべき者。

僕のすべてを理解してくれたはずの母なる人。

その想いは敢えなく潰える。

形だけの愛に飼われていた事実を突きつけられ、僕の心は決して溶けぬ氷河に覆われる。

「その愛は歪んでいる」

純真な想いは不浄なる劣情と断罪され、耐え難き苦痛の刃と化して胸に突き刺さる。そして“不良品”の烙印を押される。

純真な想いは拒絶され、偽りの思いに矯正される。

——僕を取り巻くすべてが疎ましい。

いったい何が正しいというのか？

心の底から沸き上がる想いは間違いなのか？

造られた社会の常識にそぐわぬものはすべて誤りなのか？

与えられし常識に従属せねばならない世の中ならば……僕はその世界を拒絶する。

それを誰もが独りよがりの思い込みという。単なるわがままだと後ろ指を刺す。理解よりも矯正を促す。

僕は人形じゃない。玩具でもない。弱くとも、醜くても、歪んでも、今ここに在る一人の人間だ。

僕は現実世界を拒絶する。

僕を取り巻く与えられた環境を否定する。

僕の在る小さな檻の中で、偽りの名を冠して電腦世界の光と闇を行き来し、自分だけの理想郷を探し求める。

この真偽不定な世界に身を置く事で僕は存在を誇示する。

逃げの行為と言われても“僕”を維持する手段はこれしか無いのだから。

『僕は何を求めて放浪する？』

その答えを求めて、僕は独りで異世界をさまよい歩く。

決して満たされる事は無いけれど、それが僕を救う唯一無二の方法だと思っから。

——僕は弱く、臆病で孤独に耐えられないちっぽけな人間だから……。

霧の街

白、白、白。

見渡す限り白で覆われている。

吐く息も見えず肌に凍み入る冷たさも無い。故に雪ではない。

手を動かすも視界に映る事は無く、感覚だけがそこに在る事を教えてくれる。

さらに地を踏みしめ、土の感触を確かめる。逞しき大地の存在を再認識すると思わず安堵のため息がこぼれた。

——白に覆われたのは、ほんの数分前だ。だから正体は初めからわかっていて。恐れる必要なんて無い。

それでも瞬く間に白の世界と化したこの現実には畏怖を禁じ得なかった。

いかに高度な発展を遂げた偉大なる科学でも、瞬く間に世界の景色を一変させる事はできない。一瞬にして異世界に誘う事はできないからだ。

この幻想的な白の世界は、数分あるいは数十分で消え去る。そして、人々を現実の世界に戻す——。

この幻想的な世界は、毎朝この時間にこの街だけに訪れる。なので、街の住人は慣れた様子で現実までの時を静かに待つ。

無論、視界が利かないのでその様子を実際に確かめる事はできない。だが、目に見えずとも意識すれば気配を感じる事ができたので、彼等の平静さを感じ取る事は容易にできた。

——時が経てば現実に戻る。しかし、わかっているても慣れる事はできない。

たかが、霧なのに。

たった数分の出来事なのに。

突然の世界の変化に慣れる事はなかなかできない。だから毎朝この時間は精神的な苦痛を感じてならなかった。

しかし、出勤を遅らせるわけにもいかないのです、今日もまた目を閉じて早く現実に戻るのを祈り続ける……。

「——おはよう、もう霧は晴れたよ。いつまで突っ立てるの、危ないわよ」

闇の中、聞き慣れた声が現実に返す。

目を開けば、そこには毎朝会う女学生がにこやかな笑みを浮かべながらこっちを見ていた。

……この街の住人は意地悪だ。

慣れぬ者がそばに居ると、声を潜めて白の世界に置き去りにする。慣れた者には何でも無い現象でも、慣れぬ者にはまさに異世界へ飛ばされた感覚になるのに……この街の住人ときたらこの時間になると揃って沈黙する。

いつになれば、この現象に慣れるのだろうか。一瞬にして世界が変わるこの白の世界に順応できる日は果たして来るのだろうか。そして、この街の住人みたいに慣れぬ者に意地悪をする様になるのだろうか。

それはわからない。いや、そんな事は考えるだけ無駄だろう。

毎朝繰り広げられる異世界への冒険に慣れたら、その時は自由に

その世界を闊歩する事もできる。
その時になってから考えよう。
まだ、その日は遠いだろうが……。

眠らぬ街の側面（前書き）

これは小説というよりも詩に近い作品です。夜の街で垣間見た事を詩的に表現してみました。

眠らぬ街の側面

鳴り止まぬサイレン。逃げ出す靴音が響き、人混みに見失う姿。ざわめく街はまるで舞踏会の様に、そこに在るすべてを欲望の坩堝に飲み込んでいく。

ゆらめく心と気だるい体。空っぽの魂を満たせるモノを求めてさまよう。

時は緩やかに流れ、雑踏に立ち尽くすだけ。何もかもが空白の中に置き去りにした様だ。

眠らぬ街の眠らない欲望。人の性に巧みに入り込む。落ちゆく者を糧として、止めどなく貪欲に情性を貪る。その真実は誰も気づかず、それに近づく者さえ無情に飲み込む。そして、まるで一つの生き物の様に変貌を遂げる。

近し所より遠き所。遠く見えて目の前に立ちふさがる。街はざわめき、心を麻痺させ闇に染める。

あらゆる想いを内包し、慈愛と非情を用いて弱き魂を捉える。

魂の淵より溢れる情熱だけが、こぼれる悲嘆を覆い隠す。

そこに喜びは無い。虚しさを閉じ込め、心の奥底に溜めるだけ。自らの意志無き処に安らぎはない。

掴み取る術があるなら遠目に眺めればいい。

深みに陥って抜け出せなくなる愚を犯す必要は無い。

夜の街はきらびやかな姿で惑わし、人の魔性を擡げさせる。

短き時の狭間に悦楽を与え、心を代償とする。

醜い性と偽りの情。見え隠れする一瞬が、人を引きつけてならないのかもしれない。

——夜が明け陽が昇る頃、束の間の休息につき、人群れる頃蠢き始める……。

人心寒冷化（前書き）

地球温暖化とかけてみました。ただ、それだけです f ^
| ^
;

人心寒冷化

秋。

秋は、よく食欲の秋とか運動の秋、読書の秋とか様々な形容が為されている。他にも。。の秋というのがあってもいいが、それだけ秋は何かをするのに適した季節という事なのだろう。

秋は熱い夏から寒い冬に変わる境目にある。故に残暑に苦しめられたり早い雪の訪れに苦しめられる事もある。

ここ数年、何気に“ちょうど良い”時期が少ない様な気がする。何年か前から騒がれている異常気象の影響か？

地球温暖化による気象への影響は、実は深刻だと聞いた事がある。観測史上最大の降雨量を記録したり、起きないと言われてきた地方で大きな地震があったり……その影響が我々の生活環境にモロに返ってくるのだから自然の摂理とはよく出来ている。

生きるために、よりよい生活を手にするために、また己が利益のために。

頭ではわかっているのに環境を壊す事を続けている。

自分の身に災いが降り注がない限り、事の重大さに気付けない……いや、気付こうともしない。

ニュースで流れる災害はあくまで“他人事”の絵空事。無責任な同情や憐れみを口にしても、すぐに忘却の彼方へ追いやる。そして、自らが同じ目に遭った時、ようやく事の重大さと他人の無関心さを痛感させられるのだ。

——人は、身近な者から慈しむ生き物と言われている。それ故に自分から遠い者には関心を寄せない。

言われてみると確かにそうかもしれない。

しかし、それでは決まった範囲内の交遊しか持てない。知らぬ者

を隔離するなど視野を狭くしていただけたらう。

いつからだろう、近隣との交流が薄れたのは。

いつからだろう、クラスメイトの名前が覚えられなくなったのは。いつからだろう、外で遊ばなくなり部屋で孤独を友にする様になったのは。

恵まれた環境のせいかな？

たいていの事は一人で何でも出来る時代となり、協力し合う事が無くなったからか？

それ故に独りよがりになり協調性を無くしたからか？

地球は温暖化しているのに、人は寒冷化しつつある様に思えてならない。

《相手を思いやる》という気持ち。本当の意味でその気持ちを持った者は悲しいかな、かなり減っていると言わざるを得ない現実。飾られたウワベに惑わされ、物事の本質を見極められないでいる……。

——人心寒冷化は、この満たされた世界に蔓延しつつある。

今、もう一度原点に戻り、見つめ直す必要があるのではないだろうか——。

雨はキライ

冷たい雨の雫が忙しく窓を叩き、時折外に閃光が走り雷鳴が轟く。

それが“一人”でいる事の不安を煽る。

《……今日は仕事で遅いのかなあ……》

いつもならとくにご飯を食べている時間。それなのに帰って来る気配も感じられない。

今日は朝から土砂降り。だから電車が遅れているのか、それとも止まってしまったのか。

理由なんてどうでもいい。

早く帰って来てほしい気持ちで苛立ちが爆発しそうになる。

《……寂しくてたまらないよ。言われた通り、おとなしく待ってるよ。だから早く帰って来て抱っこしてよ！》

我慢し切れなくなり、ドアに向かうとおもむろに爪を立てて引っ掻きはじめる。

《遅い！ 遅い！ 遅い！ 遅すぎるよ！》

苛立ちは頂点に達し“両手”でドアを激しく引っ掻く。

ドアの下辺は削れ、木片が床にこぼれる。傷つけたので後で怒られるかもしれない。

一瞬、怒った顔が浮かんできたが何かしていないと泣きそうになる。だから、頭ではわかっていてもドアに爪を立てて削り続けた。

……しばらくの間ドアに八つ当たりしたもの、疲れたので居間に戻りクッションの上に寝そべる。

——雨は激しく降り注いでいた。しかも風も強いし雷も鳴っている。どこかで雨宿りしているのかな？

《……外は冷たい雨が降ってる。寒いし雷が鳴ってて怖くて帰れなくなったりして……》

そう思つと心配になり再び不安な気持ちになる。

いつもならそこまで気が回らない。でも、今夜は雨も風も強いし雷も鳴っている。

……寂しくてたまらない。早く帰って来て……。

——気がつけばグッスリ眠っていた。起きるとベッドで安らかな寝息を立てている主人の姿があった。

《……もう！ 心配してたのに幸せそうに寝ちゃって！ 帰って来たなら起こしてくれたっていいじゃない！》

こんなに心配してたのに。気づいてくれない主人に腹が立った。でも、何事も無く帰って来てくれて嬉しい。

不意に風が窓を叩いた。そして雨音も大きくなる。

《……そうよ、すべては雨のせいよ！ 雨が降ったから帰りが遅くなるのよ！》

この天気がすべて悪い。そう決めつけると安心したのか、なんだか眠くなってきた。

ベッドに上がり毛布に潜り込むと主人の胸の上に登る。その暖かな温もりを感じると静かに目を閉じた。

今宵は夢の中で甘えよう……。

銀色のまゝるい友（前書き）

ウチにある時計がモデルです（一）

銀色のまゝるい友

時を刻む針の音は控えめに。主の眠りを妨げない程度に刻むのが礼儀だ。

できるなら、安らかな眠りを誘う心地よいリズムを奏でられれば言う事はないのだが、一昔前に作られた故それはご容赦願いたい……。

——もう、主とは十数年の付き合いになる。

初めて主と出会ったのは駅前の大型デパート。その三階にある小さな時計屋だった。そこで金銀の二色セットで格安販売されていたところを主に買われたのだ。

ちなみに私の色は銀色で形は卵型である。今となつては所々汚れて以前の面影は薄い。主はそういうところは無頓着なのだ。

時を同じくして作られたもう片方は、間もなく主の友人の元へ旅立った。なんでも友人が県外の大学に行くので饒別にて我々を購入したという。それが我々を買うきっかけとなった様だ。

金色の時計は今どうしているのか。まだ時を刻んでいるのか、はたまた悠久の眠りについたのか。それは知らない。

我々の寿命はそんなに長くない。私がまだ現役でいる事の方が奇跡といつても過言ではない。それを思えば……いや、何も言わないでおこう。

主と私は朝と夜しか顔を合わせる事はない。

——朝、私は時を告げ主を眠りから覚ます。その時は全身全霊を込めて主を夢の世界から引きずり起こす。自慢ではないが、今まで

一度たりとも主に寝坊をさせた事はない。これは私にとって唯一無二の勲章だ。

目覚めた主は私の頭上にあるボタンを押して朝の支度を始める。そして仕事へと出掛けて行く。

それから私は部屋で静かに時を刻む。窓越しに時間の移り変わりを感じながら主の帰りを待つのだ。

――夜、疲れた顔の主がいつもの起床時間をセットする。

これを忘れられると私は主を起こす事が出来なくなる。故に主が部屋に入って来ると私は無言の呼び掛けを繰り返し主を呼び寄せる。これがなかなか骨のいる仕事だ。

普段はすぐに気付いてくれる。どんなに疲れてても必ず私の元へ来てくれる。

だが、主がお酒を飲んで来た時は大変だ。酔っているから私に気付けてくれないし、着替えもせずそのまま寝てしまう時もあるのだ。それでも夜中に目覚めると慌てて起床時間をセットしてくれる。そのおかげもあって主は今まで寝坊をした事がない。

私はいつまで時を刻み続ける事が出来るだろう。最近、少しずつ時が遅れてきている。

電池が無くなってきてるわけではない……そう、寿命が近付いてきているのだ。

いつまでも時を刻み続ける事は出来ない。いつかは時が止まってしまうだろう。

それでも十数年も動き続けてきたのだ。十分に役目は果たせたと思う。だから、その時が来るのを怯える必要はない――。

時は流れ続ける。

私が動きを止めても。主が消えて無くなっても――。

秋晴れ散歩

電車にゆらゆら揺られ車窓の景色を眺める。

ゆつくりと流れる風景に妙な哀愁を感じながら目的地までの旅を楽しむ。

朝夕のラッシュ時なら、そんな気持ちのゆとりなどとても持てそうにない。皆が登校・出勤を済ませた頃合いを見計らって電車に乗るから味わえる束の間の旅情。

実際はたいした事の無いその一時も……考え様によってはちゃんとしたイベントに変わるのだ。

秋晴れの車内は日が差し込むので穏やかな陽気に包まれている。

厚着をしていると少し汗ばむくらいに陽の光が燦々と降り注ぐ。

外に出れば冷たい風が冬の足音を聴かせてくれるが、建物の中にいる分にはまだ秋を満喫できる。

短い秋を味わう事ができる。

束の間の旅情は忙しない日々により一時の安らぎを与えてくれる。心休まる時間が限りなく短いこの世の中で、ほんの少しの心の休息は何物にも代え難い。

本当にたいした事の無い日常の1ページに過ぎないのだが、そう思ってしまうのは何故だろう。

それだけ日々の生活に心身共に疲れているのだろうか。

ふと、そんな事を思う。

冷たい風が身に染みる今日この頃。

秋晴れの空の下、強い日差しを浴びながら道を歩く。

こんな日もたまには良い。気持ちに余裕が出て日々の疲れを癒や

してくれる。

日常に垣間見た旅情に頬を弛ませ、いつものより軽い足取りで家路に向かう。

短い秋だから。

この一時を満喫しようといつもよりも景色を楽しみながら帰路に着いた……。

過去に縛られた女（前書き）

時期的に近いので今回はクリスマスのお話を書きました。

過去に縛られた女

虹が降りる丘。

星の降り注ぐ河原。

月明かりが映える海。

……あなたと歩いた季節。輝きに満ちた日々。
今も記憶の中であなただけは微笑みかける――。

時の流れは早く、いつか二人で見たクリスマスツリーが街を活気づけていた。

大通りのケヤキ並木に取り付けられた数え切れないほどの電球が幻想的な世界を作り上げ、恋人たちはその煌びやかな光の下に集い愛を語り合っている。

商店街の店先に並ぶクリスマスグッズにサンタの衣装を着た店員たち。毎年見てるその光景が私の心を締め付ける。

華やかな雰囲気から目を逸らす様に俯き加減に足早に歩く。道行く人の流れに逆らい私は駅へ向かう。

――改札を抜けホームへと降りると着いたばかりの電車から大勢の人たちが次々と降りて来た。

そのほとんどはカップルだ。

今日はクリスマススイブ……今宵の主役は彼等なのだ。

私は彼等がいなくなるのをホームの隅で待ち誰もいない車内へ乗り込む。そして、いつもの席に座り発車までの短い時間を虚しさと共に待ち続けた。

来る時の半分にも満たない乗客を乗せた電車は定刻通りに駅を出発、流れる景色を眺めながら束の間の休息を取る。

だが、窓ガラスに映る寂しい車内が空虚に思え心は休まらない。それでも乗車時間が短いので私は外に意識を向けて時が過ぎるのを待った。

電車を降りると向かいのホームには大勢の人ばかり。これから街へ向かうのだろう。それを横目に通路を通り改札を出る。

駅の外にはいつもの賑わいはない。

人の熱気がないのでいつもより寒く感じる。私は少し体を温めてから帰ろうと駅前のコンビニへ入った――。

……あれから半年が過ぎた。不意にその時の記憶が蘇る。

梅雨の激しい雨の日に突然の別れを告げ、私の前から姿を消した彼。

愛していた。信じていた。何の疑問も持たずに将来に希望を抱いていたあの頃。

まさか他に付き合っている人がいたなんて私は夢にも思わなかった。その事実を知らされると共に彼は私の前から去って行き、残された私はどうしていいのかわからずただ狼狽えるばかりだった。

振り返れば幸せな日々。思い出すのは彼の優しい微笑み。まるで夢だったかの様に彼から電話が来るんじゃないか、なんて思うほど現実味を感じない。

私はいまだに彼の影を払拭する事ができないでいる。未練がましいとわかっていても、その別れを私は受け入れられないでいた……。

コンビニを出るといつの間にか雪が降り始めていた。

それを見て今夜は寒くなると天気予報で言っていたのを思い出す。

それなのに傘を持って来るのを忘れてしまった私はつくづく駄目な女だと悲しくなった。

こんなんだから愛想をつかしてしまったのだろうか？

儚げに降り注ぐ雪に私の心も冷えていく。切ない気持ちに胸が痛み、幾度となく繰り返し返した自己嫌悪に陥る。

——このままじゃいけない。早く過去から立ち直らなければ。

時は止まらない。いくら悩んでも時を戻す事はできない。そして、一度失った人の心も……。

雪の中、ゆっくりと歩きながら葛藤し続ける。

立ち直るまでどれくらい時間が掛かるだろう。愚かで弱い私が、

この過去を振り切り新しい恋に目覚めるまで。

——そう簡単に人は変わらない。それでも変わる努力をしなければ前に進む事はできない。

不安な気持ちでいっぱいだけど、とにかく前に進むしかない。

白くなりつつある道を歩きながら、私は見えない未来に思いを馳せた——。

言葉にならない（前書き）

詩的なお話。お馴染み？のグダ系です。

言葉にならない

——そつと、瞳を閉じた。

君の眼差しが眩しいすぎるから。

その瞳に吸い込まれ、自分を見失いそうになる。

こんなにも愛して止まない君を正面から見つめられない。

月明かりが差し込むベランダでソファーに腰掛けた彼女は、柔らかな笑みを浮かべながら窓越しに映る夜景を見つめている。

臆病な僕は、気の利いた言葉を囁く事もできずに隣で身を固くして途方に暮れる。

彼女は待っている。

変化の時を。

変えるのは僕だ。

今思っている言葉を口にすればいい。

それが無理なら抱き寄せればいい。

彼女はきつとわかってくれる。

ほんの少しだけ勇気を出せば変えられる。

一歩だけ足を前に踏み出せば……二人の途は交わり一つになるはず。

勇気。

ひとかけらの勇気があれば。

静寂が支配する部屋で、たった一言が口にできない。

——言葉にならない。

この気持ちを言葉にできない。

この想いは陳腐なセリフで表す事などできない。

それでも、この身から溢れ出る想いを伝えたい。

それでも、この想いは言葉に変えられない。

愛しさと切なさ。

不安と期待。

様々な想いが交錯し、本当に伝えたい言葉を見失う。

愛しくて、切なくて、儚すぎる無音の時。

今宵も僕は踏み出せずに彼女を待たせてしまう。

——そつと、瞳を閉じた。

君の眼差しが眩しいすぎるから。

臆病な僕はその真摯な瞳に胸が締め付けられる。

君がくれた愛が心に染みて、この想いを果てしなく膨らます。

口にできない。

声に出せない。

言葉にならない。

たった一言が伝えられない。

いつまでも続く沈黙の時。

心を奮い立たせて前に踏み出せ。

ほんの少しだけ、ひとかけらの勇気を振り絞ればいい。
そうすれば変えられる。二人の未来は変えられる。

言葉にならないなら想いを込めて瞳で語ろう。

彼女はきつとわかつてくれるから……。

l a s t v o i c e 時は動き出す (前書き)

半年ぶりの更新です (^ー^ ;)

last voice 時は動き出す

「——憲広の言いたい事って、将来のビジョンが見えないから流されるまま惰性で生きてる、ってコトだよな？ それってさあ、事なかれ主義が招いた結果じゃないの？」

そう言って長い髪に指を巻き付けながら彼女は少し険を含んだ目で男——憲広——の顔を一瞥する。

店に流れる音楽がやけに耳障りに聴こえてならない。憲広は気まずそうな表情で彼女の言葉を反芻した。

——自分でも“それ”に気づいてる。

何をすれば結果に繋がるのか、目先の事にとらわれて“その先”を見通す事が出来ない。だから見に徹してしまい機を見逃す。失敗を恐れ、すべてを惰性で受け流してきたツケが……心の空虚感となって返ってきたのだ。

一歩前に進む勇気が無いから何も手にする事が出来ない。それ故に愛した人の心はいつの間にか離れ、自分の不甲斐なさを突き付けられ、そして夢も希望も無い生きた骸の様に目先の安寧を求め打算的な選択に終始する。

「……ここにきて、行き詰まってしまったのね。それでどうするの？ せっかく決めた就職蹴って自分探しの旅にでも行く気？ それとも就職を機に自分を変えていく？」

結局、自分で解決していくしか方法はない。彼女の言葉が憲広の心の中に“現実”を突き付ける。

時は止まらない。どんなに足掻いても過ぎ去った日々は戻らない現実が彼の心に焦燥感を与える。

そこには、これから社会に飛び出す若者の“将来への苦悩”が顕

著に現れていた。

惰性という楽な選択を繰り返し、立ちふさがる困難を避け続けてきた報い。檻の中の鳥の様に与えられるままに甘えを享受してきた彼の人生において、決して避けて通れない初めての“壁”となつて立ちはだかる。

自立を目の前にして、彼は自分の生き方に疑問を感じていた。そして、こんなにも自分の存在が小さく弱いものであるかを痛感させられる。

「——俺、今まで何してきたんだろうな……」

憲広は自嘲気味な笑みを浮かべうなだれる。

「もう、開き直って行くしかないのか？ でも、何をすればいいんだ？ 何から手をつければいいんだ？ 真由、お前は自分のしたい事や将来へのビジョンは見えてるんだろ？ ずっと一緒だったのに……俺とお前で何が違ってたんだ？」

憲広は幼い頃から一緒だった彼女に思わず問い掛けていた。それもまた“甘え”だという事に気づかず。

その言葉に彼女は呆れ顔になる。軽い失望を覚えると同時に彼の真剣さが胸を締め付ける。

（……でも、責任の一旦は私にもあるわよね。いつつも甘やかしてきたもんなあ……）

幼い頃から一緒だった故に、真由は憲広の甘えや我が儘を許してきた事を思い出す。

付き合っていた頃、彼のその自分勝手な行動や言動に苦い思いをさせられてきたのに。それでも彼を決して戒めようとはしなかった自分がいた事を思い出していた。

（——そう、私は彼をほったらかしにしてきたんだ。徐々に気持ち が冷めていって、最後の方なんか理解しようとしなかったもんねえ。でも、もう遅いのよ。これから二人は別の道を歩くんだから、もう二人の道は交わる事は無いんだから、もう何のフォローもできないのよ）

真由は憲広の情けない姿に思わず同情しそうになった。だが、ここまで来て同じ過ちを繰り返させるわけにはいかない。

それに、もう二度と会う事は無いのだ。最後にひとつ、彼に何か残してあげてから旅立とう。

彼女は胸中を駆け巡る複雑な想いを抑え、最後まで話をしようと彼に向き直った。

（……こんなダメ男にしたのは、ある意味私のせいでもあるからね……）

冷めきつた思いの中に残ったひとかけらの愛情。

決して悪い思い出ばかりじゃなかった。本気の愛を自分に向けてくれた時も確かにあったのだ。

目の前でうなだれる彼の手を取り、真由は静かに口を開いた。

「——憲広、あれこれ考えるのはもう止めましょ。私達、まだまだ子供だもん。答えなんてわかるわけじゃないじゃない。それに私はただ、夢を追い続けただけで特別な事なんて何一つしてない。ハッキリ言って将来へのビジョンなんて見えないし、あっけなく夢破れて日本に戻るかもしれない。でも、先がわからないからこそ希望を持って前に進めるんじゃないかな？ 憲広、だから今はあれこれ考えずに自分に出来る事をしてみたいと思うよ。これからの人生の方が遥かに長いんだから、ね？」

言い終えてから真由は憲広の手を握り締める。

これが最後。だから、頭の片隅にでも残る言葉を伝えたい。

——その思いが彼女の気持ちを振り切らせ、彼への決別を固めさせた。

彼女の眼差しが痛かった。それとともに今までの弱気な自分に苛立ちを覚える。

（ホントに情けない奴だ。真由に甘えてばかり……俺は、彼女の愛にしがみついていたただけだったんだな。もう自立しなくちゃダメだ）

憲広は、彼女の言葉を決して忘れないと心に誓った。

もう会いたくなかったであろう自分の話に最後まで付き合ってくれた事。それだけでも感謝の念を抱かずにいられないのに、彼女は自分を正しい道へ導こうとしてくれた。

「……真由、ホントありがとな。俺、お前の言葉で目が覚めたよ。なんて言うか、道が開けた様な気がする。何も知らない若造が、先の事考えてクヨクヨしても仕方ないよな。ありがとう。お前の言葉、決して忘れないよ」

憲広は真由の眼差しを受け止め、これが最後の会話になると思い素直な気持ちを吐露した。

「俺なりに頑張ってみるからお前も外国で頑張れよ。お前と出会えてホントよかった……」

「そう……」

軽く受け流す様に素っ気なく答えると真由は席を立った。

「……私も同じ気持ちよ。もう少し早くこうやって話してればよかったね。ま、失った時間は戻らないから……このまま行くね。あなたと出会えてホントよかったよ」

そう言つと真由は振り切る様に憲広には見向きもせず足早に店を後にした。

飲みかけのレモンティーは互いの心を表す様に冷え切っていた。それでも甘さが消える事はない。

憲広はコーヒークップを手にとると冷たくなった液体を喉に流し込み、彼女の未来が輝けるものになる事を静かに祈った。

（……さよなら、真由）

告げなかった最後の別れの言葉を胸にしまい、憲広は過ぎ去った日々を思い、まだ見ぬ未来に思いを馳せた――。

未来に希望を寄せて（前書き）

クリスマスをお題にした短編。

未来に希望を寄せて

街中が煌びやかなイルミネーションに包まれている。

昨夜から降り続けた冬の妖精達が街を白く染め上げる。その雪化粧の中を様々な色彩が照らし優しい灯火と化す。

柔らかな光が人々の心に彩りを添え、賑やかな夜を演出してくれる。華やかで艶やか——そして、人々の心を躍らせる魅惑の宴。だが、それでいて何故か神聖な気持ちにもさせてくれる不思議な空気に包まれた日。

誰が決めたか、一年で一番神聖な気持ちさせてくれる“聖なる夜”……本来の意味とは違うらしいが、端から見ても道行く人々の表情はどれも優しさに満ちていた。

これが《クリスマス》という名の特別な日の力なのだろうか？
その道行く人々の発する雰囲気にも僕も少なからず影響を受けはじめている様だった……。

『いつもの広場で待つてるね』

彼女の一言メールに少し戸惑いながらも僕は従った。

こんな日に呼び出すなんて何かあったのか？

幼い頃から気まぐれに僕を振り回す彼女。しかし、二人の間には男女の隔たりはなかった。

いつも一緒にいるからか、ただ単に見慣れた姿に“他人”である事を失念していたのか。姉弟よりも深い絆で結ばれるも他人よりも

遠くに感じる存在……二人の間には何も無い。

そんな彼女の他愛も無いはずのメールに、僕は何故だか心のざわめきを感じて落ち着く事ができなかった。

この特別な日の雰囲気飲まれたのか？

僕はその答えを見つけられないままにいつも待ち合わせる駅前広場へ向かった。

——駅前だけあって人々の群れは多い。いや、いつもよりも明らかに多い。しかも気温に反して熱気が漂っている。

僕は肌寒い空気にコートを抱き込む様にしてベンチに座り彼女を待った。

「——ごめん、待った？」

背後から聞き慣れたハスキーボイスがこだました。

突然の彼女の出現に僕の胸の鼓動が大きくなった。明らかに動揺している。心が激しく揺れ動くのを強く感じて僕は返事をすぐに返す事ができなかった。

「どうしたの？ そんなに驚いた？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら彼女は隣に座り、少し上目遣いに僕の顔を覗き込む。その瞬間、ドクンツと鼓動が大きく波打つ。それと同時に顔が熱を帯びてきた。

（いったい、どうしたっていうんだ）

いつもと違う状況に僕の頭はパニック寸前になる。彼女の声が、笑顔が……僕の心を掻き乱す。

この“特別な日”が僕を惑わせるのか。普段なら意識せずに接する事ができるのに。今日に限って妙に彼女を意識している僕がいる。「ホントにどうしちゃったのよ？ あ、もしかして熱っぽい？

顔、赤くなってるよ……」

反応の鈍い僕を見た彼女は、赤くなったのを熱と勘違いして表情を少し曇らせながら手のひらを僕の額にそっと当ててきた。彼女の温もりが額から染み込んでくる感覚にさらに顔を赤くする僕。

「だ、大丈夫だよ。ちょっと走って来たから体が熱くなってるんだよ」

このままでは風邪だと思われてしまう。僕は照れを隠す様に声を抑え、いつもより冷静な口調で言うとう頭を振って彼女の温もりから逃れた。

「……ふうん、それならいいんだけど。本格的に寒くなってきたから風邪には気をつけてね」

いつもよりも優しい口調で囁きかける。その視線も柔らかく僕の心を優しく包み込んでくれる。

—— おかしい。何かがおかしい。

僕の心はまるで魔法に掛かったかの様に彼女に引き込まれていく。僕の中の“何か”が変わりつつあるのを強く感じた。

目の前で微笑みを浮かべる彼女。気のせいか、いつもの気まぐれな態度と違い今日はやけに女らしく見える。

彼女の心境に何らかの変化でもあったのだろうか。そう思ってしまうほど今日の彼女は違って見えるのだ。

僕が大丈夫なのを知ると彼女はベンチを立ち、僕の手を引いて無理矢理立たせた。

「——じゃあ、行こっか」

「えっ？」

突然何を言い出すんだ。何の約束もしていないのに、いったいどこに行こうっていうんだ。

訳もわからず彼女に引く張られる僕は思考回路が一瞬止まる。

そんな僕に向かって彼女は一言だけ呟く様に囁いた。

「……今日は年に一度の特別な日だよ。今日だけのイベント目白押しだよ。せっかくのクリスマスなんだから一緒に見て回る！」

そう言っただけで彼女は僕の腕に手を回し寄り添う様にくっついてくる。

「……えっ？ ええっ!？」

その言葉に僕の胸の鼓動は一気に高まった。

それって……。

——僕の頭の中はもうグチャグチャになった。顔は火照りのぼせそうになる。

そんな熱くなった僕の頬に冷たい雫が触れた。

「あつ、雪降ってきたね。今夜は寒くなりそうだね」

そう言うとき彼女は回した腕に力を込める。それにより僕の熱はさらに上昇した。降り出した雪でヒンヤリした頬が再び熱を帯びる。体だけじゃない。心も熱くなってきた。

胸の高鳴りは止まる事を知らず激しい鼓動と化する。

……もしかして、これは恋の始まりってやつなのか？

彼女に引つ張られながら僕はこれからの二人の関係が確実に変わるのを感じた。

……彼女も同じ気持ちかな？

ふと不安がよぎる。いや、今はそんな事を考えるのは止めよう。

今夜は二人きりのクリスマスを満喫しよう。また来年も一緒に過ごせる様、今日という日を目一杯楽しもう。

未来なんてわからないのだから——。

風に負けない（前書き）

風をテーマにした短編。クリスマスのお題小説の続編みたいなもの。

風に負けない

——撒き上がる砂埃。

思わぬ突風に手をかざし、目を閉じて吹き抜ける時を待つ。

無意識に身を強ばらせ息も詰まる思いで瞼を固く閉ざす。

闇の中で一陣の風が刹那の暴威を奮い、肌を刺す冷気を残して無に還る。

雪の季節に吹き抜ける風は、大地に積もる冬の妖精を凍らせ足元を不安定にさせていた。

目を開けば消え去った風の名残が大地に広がっている。

薄氷の上を渡るが如く、されど足を取られぬよう力を込めて歩む影。

逸る想いに駆け出したくなる焦燥感を抱きながらも、それを懸命に抑え一步一步確実に大地を踏みしめ彼は先を急いだ……。

いつからだろう。

彼女を意識し始めたのは。

思い描くだけで胸の鼓動は高鳴り、声を聞くだけで心ときめく様になったのは……。

——幼い頃から気まぐれに振り回す彼女。姉弟より深い絆で結ばれるも他人より遠くに感じる存在。二人の間には何の隔たりもなかったはず。そんな身近な存在に心揺れ動き、想うだけで胸が熱くなっている——。

彼は積もる雪のカーペットを恐る恐る進みながら己に問い掛ける。
(……わかってる。あの日から、僕らの関係は変わったんだ……)
あの日。

《聖なる日》と称されるあの日にサンタさんから贈られた“恋”という名のプレゼント。

あの日から二人を包む空気が変わったのだ。
クリスマスを境に——彼は初めて人を好きになる気持ちを知り、どこことなく変わった彼女の態度に戸惑いを覚えつつもその恋心を大きくしていく。だが、日に日に強まる想いに彼は不安をも覚えていた。

自分に対する彼女の態度はあの日を境に確かに変わった。しかし、いまだに想いを伝え切れぬ上に彼女の気持ちもはつきり聞いたわけじゃない。

——もし、勘違いだったら？

そう思うと胸を締め付けられ切なさがこみ上げてくる。そして、以前よりも“距離”を感じてしまう。

(……幼なじみという関係は終わったんだ……)
意識し始めた時から、彼女を“幼なじみ”としてではなく“異性”として見るようになった。それが微妙な距離を生み出し、彼の心に期待と不安を抱かせる。

今まで気にもならなかった男友達との他愛のないお喋りも……不安と嫉妬を煽る鋭い痛みに変わり、彼女に対する独占欲に自分を見失いそうになる。恋する切なさにも悶え苦しむ。

——彼女は、自分の事をどう思っているんだろう？

待ち合わせ場所にいる彼女は、どんな気持ちで自分を待っているのか。

同じ気持ちなのか、それとも……。

——鳴りを潜めていた風が再び彼を襲う。今度はまるで恋の試練と言わんばかりの烈風が行く手を塞ぐ。

しかし、今度は立ち止まらなかった。

この恋はまだ始まったばかり。こんなところで挫折ちゃいけない。この風に打ち勝てば恋が実るんだ、と自分に言い聞かせながら彼は一歩一歩進んで行った……。

冬に咲く花（前書き）

お題小説の第三弾。彼女視点です。短編シリーズ化しようと思いましたが…詳しくはブログを参照。

冬に咲く花

燦々と降り注ぐ日差しと時折吹き荒れる風のコラボレーション。
路面は所々凍っており、車の流れはいつもより鈍い。道行く人の
流れも今日は少なく途切れがちになっていた。

駅前のカフェで彼女は待ち合わせの時間よりも早く来て窓の景色
を眺めていた。

時計を見れば、まだ約束の時間まで一時間もあつた。

「早く来すぎちゃったなあ……」

彼女は小さくため息を漏らすと頬杖をついた。

窓から見える景色に思いを馳せるも、すぐに時間が気になって携
帯電話のディスプレイ画面に目が行ってしまう。

そわそわして気分が落ち着かない。冷めた紅茶を口にするが味も
感じられない。

（……なんか、おかしいわね。いつも一緒なのに、こうして外で
会つと緊張しちゃう……）

慣れ親しんだ相手なのに、何故か意識している自分がいる。

その事に疑問符が湧き出る。

——いや、本当はその答えを知っている。しかし、まだ素直にそ
の気持ちを受け入れられず無意識のうちに心の奥底に押し込んでい
るのだ。

「ホント、早く来すぎちゃったなあ……」

何度目かのため息。

時間は五分と経っていない。

モヤモヤする気持ちと共に苛立ちが沸々と湧いてくる。

（なんで、こんなに悩まなくちゃいけないのよ。いつも通りにしてればいいじゃない）

首を振って心の曇りを払拭しようとするも一度意識してしまったものはなかなか拭いきれない。

気持ちの置きどころをまだわかっていない彼女は、そのモヤモヤを怒りに転嫁する事でしか落ち着きを取り戻せないでいた……。

「——遅いつ！」

席に着くなり、揺れ動く気持ちを一気に吐き出すかの様に彼女は怒りを爆発させる。

彼はチラリと時計を見る。五分も遅れていない。

それなのにこの仕打ち？

彼は思わず首を傾げてしまう。

「……そ、そんな。五分も遅れて……ハッ」

いけない。この状況で口答えはマズい。しかし、時すでに遅し。

「何よ！ 遅れておいて言い訳するつもり！？」

頬を膨らませ、立ち上がりらんばかりの勢いでまくし立てる。こうなったらもう彼女の小言を黙って聞くしかない。

「デートで女の子を待たせるなんて……まったくもう、少しは気を利かせて早めに来なさいよ」

「ごめん。今度から気をつけるよ」

彼は頭を下げた謝る。

なんとか機嫌を直してもらわねば。内心、このまま帰られる事を想像し焦りが生じる。

「あ、あのさ、今日は映画を観に行こう。ほら、美咲が観たがつてたやつ……」

そう言っただけで慌てた手つきでポケットからチケットを取り出し、ようやく怒りを収めた彼女―美咲―に差し出す。

ポケットの中でくしゃくしゃになったチケットを手渡された美咲

は、その作品を見て表情を綻ばした。

「……あら、学ちゃん。よく覚えていたわね？　これ、観に行く機会なかったのよ」

チケツトをまじまじと見ては嬉しそうに笑みを浮かべる。

そのあどけない表情に学の鼓動は大きく波打った。

（か、かわいい）

前もってクラスの女の子から情報を聞き出した甲斐がある。彼――学――は心の中でガッツポーズして彼女の機嫌が直った事を喜んだ。猫の目の様にコロコロ変わる彼女の態度にいつも振り回される学にとって、この些細な変化でさえ大きなカタルシスを生む。どちらかと言えば引つ込み思案で小心な彼は彼女に主導権を完全に握られているのだ。

彼女もまた、学の意外な行動に胸の高鳴りを感じていた。いつもは少し頼りなく見えるのに今日はちよつと違って見えたから。

遅刻してみたりチケツトをくしゃくしゃにしたり、と不器用なトコは相変わらずだったけど一生懸命なところに美咲の心は再び揺れそうになった。

（……やだ、ドキドキしてきちゃった）

美咲は不意に目を閉じると、高鳴る鼓動を落ち着けようと小さく息を吸い込むと内に溜まった熱とともにゆっくりと吐き出す。

だが、その間も自分を見つめる視線を感じてしまい緊張はほぐれない。

今、彼は何を考えているのか。

黙って見つめる学の表情に美咲は自分のペースが保てなくなってくる。だから、つい攻撃的な態度に出てしまう。

「何見てんのよ！　恥ずかしいじゃない！」

そう言って視線から逃れようとそっぽを向く。

「うつつ」

ぞんざいに扱われ学はうなだれる様に視線を落とす。端から見て

も落ち込む様子が見て取れた。

せっかく良い雰囲気になりかけたのに。

美咲は言ってから後悔の念に駆られる。

（ああーん、調子狂っちゃうな……）

こんなはずじゃなかったのに、と美咲は自分の思いと態度の違いに頭の中がグチャグチャになっていた。

——まるで、魔法にかかったかの様に感情が湧き出てくる。

その感情に振り回され、心にも無い言葉を浴びせている。

いったい、何がそうさせてしまうのだろう？

今までそんな事はなかったのに、いつからか自然に接する事ができなくなっている。

視線を戻せば、少し不安げな表情で自分を見つめる学の姿が映る。その切なげな表情に美咲の胸は痛みを覚えた——。

……記憶を辿れば思い当たる節がある。

あの日だ。

特に意識していなかったクリスマスのデート。

久しぶりに二人で遊ぼうと誘ったあの日から、お互いに意識し遠慮がちになった気がする。そして、そんな微妙な空気が苛立ちを募らせては学に当たっている。

——本当は気づいている。それなのに素直になれないだけ……そんな自分を情けなく感じる。

目を逸らし続けた想いを受け入れられない自分に腹が立つ。

（……もう、誤魔化しきれない。やっぱり、学のこと好きなんだ！）

ここに来て美咲は目を逸らし続けてきた想いを受け入れる。

（……あれ？）

そう思った途端、憑き物が落ちた様に自然と気分が軽くなった。

（……あれ？）

これまで胸の辺りがモヤモヤしていたのに。今は澄み切った青空の様に何故かスッキリしている。

その変化に美咲は逆に戸惑ってしまふ。

（ああ……）

だが、美咲はすぐにその意味を悟り笑みを浮かべた。

「——学ちゃん、ごめん。ちよつと言い過ぎたね。せつかくチケツト取ってきてくれたんだもん、映画観に行こう！」

美咲は両手を合わせて笑顔で学に謝る。

その変化に一瞬、学は反応し切れず呆気に取られた表情になった。
「ふふふっ」

その表情もかわいい。学のそんな間抜けた顔に美咲は思わず声を漏らした。

そして、席を立つといまだに不思議そうな表情で美咲を見る学の
手を取る。

なんだか気分が軽い。心の中が晴れやかだ。
一度受け入れてしまうと気分がこんなに軽くなるんだ。
そう思うとちよつと大人になった気がする。

（……気がつけば、単純な事ね……）

美咲は戸惑う学を引っ張る様にして店から出た。
手の温もりを逃さぬ様、強く握り軽い足取りで歩く。それとは対
照的に、凍った路面に足を取られぬ様必死に歩く学の姿が微笑まし
い。

時折吹く風も気にならない。

路面を照らす冬の結晶も二人を導く光の道に思える。

（ちよつと詩人かな）

恋する気持ちも知った事でひとつ成長した彼女は、妙に晴れやか
な気持ちで今日という日を楽しもうと考えを巡らせはじめた……。

冬に咲いた花。

冷たい風にも、雪の囁きにも負けぬ花が美咲の心に芽生えた。

華やかな色彩を宿した花の名は恋。

冬の午後に咲き乱れる花は吹き荒れる風も何のその、力強い輝きを放っていた――。

犬になった男と白い猫

朝、目覚めたら犬になっていた。

ワンワン、ワンワン

ワンワン、ワンワン

……声が出ない。鳴き声しか出てこない。

訳のわからない事態に困惑。吠えられて隣人迷惑。

これ、どこのCM？

自身の置かれた状況に思わずツツコミを入れる。

困惑したまま部屋の中を動き回る。

普段見る光景がやけに遠くに見える。

体のサイズが小さくなったからか？

見るものすべてが大きい。しかし、小さくなったせいかな体が軽い。
狭い部屋の中を駆け回る。ものすごい勢いで流れる景色が新鮮だ。
……いや、そんな事してる場合じゃない。この現実離れた状況を
どうにかしなければ。

この状況を家族に見られたら大変だ！

部屋の中に見知らぬ犬がいたらどうする？

まず、驚くだろう。それから保健所に連絡し捕縛され檻に軟禁さ

れる。そして、飼い主も引き取り手もないので薬殺される。

マズい！

命に関わるじゃないか！

早く元に戻らないと大変だ！

とりあえず家族に見つかりとヤバイ。事情を話せない今、捕まったら保健所に護送される。

ひとまず安全を確保する事が先決だ。

突然行方を眩ませて大騒ぎになるだろうが、そんな些細な事はどうでもいい。命には代えられない。

さて、家から出るには――やっぱりベランダしかないな。

この姿で廊下に出たらバカだ。

窓を開けて……あ、でもどうやって降りればいいんだ？

この体じゃロッククライマーばりに壁に伝う事なんて出来やしな
い。

じゃあ、猫みたいに飛び降りる？

うーん、ちょっと怖いなあ。

着地に失敗したら、その時点で昇天してしまう。あまり危ない橋は渡りたくないな。

とりあえず屋根に上ろう……。

うわー、屋根の上って意外にバランスが取れんなあ。

傾斜があるから当たり前か。

まあ、人が上がるのを想定して作ってないもんな。愚痴っても仕方ない。

《……おい、何ブツブツ喋ってんだ？ 気味悪いぞ》
バランスを取りつつ思案に耽っていると、突然声を掛けられた。
「えっ？」

一瞬、家族に見つかったのかとビククリしてバランスを崩してしまふ。

「あわわ……」

慌てて体勢を整えると声のした方に視線を向けた。

《なんで屋根に上がってんだ？ ずいぶん器用だな》
そこには、少し呆れた表情で話す白い猫がいた。

《でも、なんだか今にも転げ落ちそうな……もしかして、上がった方がいいが降りれなくなったのか？》

目をクルクルさせ興味あり気に聞いてくる。

（……こいつ、見てわかんねーのかよ）

人の苦勞も知らないで、って知る由もないか。

よし、こいつに降り方を教えてもらおう。

《……おい、思いつきり聞こえてるんだが。お前、思った事が口に出るタイプか？》

そう言って近づいてくるといきなり前足で押してきた！

「うわっ、あぶねっ！ ちょ、殺す気かよ！？」

慌てて体勢を低くし屋根にしがみつく。

《ははは、ちよつとした冗談だよ。気にすんな。落ちたぐらいじゃ死なないって》

悪びれた様子もなくサラツと言い退ける。ホント、人の気も知らないで。

「猫と一緒にするなよ。言っても信じてもらえんだろうが、さっきまで人間だったんだからよ……」

言ってて悲しくなってきた。

いったい、どうしてこんな目に遭わないといけないんだ？

すると、猫は啞然とした表情で固まった。

《……それ、本当か？》

驚くわけでも一蹴するわけでも無く聞き返す。

「嘘ついてどーするんだよ。起きたら犬になってたんだよ……」

このままじゃラチが開かない。文字通り猫の手も借りたい状況だったので、起きてからの経緯を猫に話す事にした。

人間に戻るためにも、どんな情報でも欲しいから味方は多いに越した事はない。

事情を一通り話すと、猫はおもむろに山の方に首を振ってみせた。

《お前、人間だったんだから山に神社があるの知ってるだろ。あそこの神様に事情を説明してみる。きつと何とかしてくれるぞ》

猫はそう言う顔と顔を近づけてマジマジと見つめる。

《確かに人間っぽいな。まあ、あんましクヨクヨするな。もし人間に戻れなくても、神様のおかげでこの街は住み心地いいから特に困らんぞ》

いや、そういう問題じゃないから。

人間に戻れなかったら……あれ？

《どうした？》

戻らないと困るけど、戻らなくても別に困る事もない。

嫌な勉強や進まぬ就職活動、将来への不安の方が遥かに大きい。でも、家族に心配掛けるわけにはいかないよな……。

《そうだな。家族は大事だ。家族を悲しませるのは良くない》

「あれ？ また口に出てた？」

思ってる事に返事をされ、また無意識に口に出ていた事を知る。

《気にすんな。まだ慣れてないんだろ？ そうだ、暇だから神社まで案内してやるよ》

猫は前足で頭を掻きながら少し照れくさそうな表情で言う。

その優しさに胸がジーンとしてくる。

「お前、優しいんだな」

《やめろよ。暇なだけだ》

猫は顔を背けて歩き出した。

《早く来ないと置いていくぞ!》

はは、照れてるよ。

猫のおかげで気持ちが悪く落ちてきた。

足早に進む猫についていく。この体に慣れない事を考慮してくれてるのか、歩きやすいところを選んで進む。

気がつけば不安な気持ちは消えていた。しかも、なんか大事なものを知った気がする。

こいつは信用できる。

山に着いたら“神様”に詳しく事情を説明しよう……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9809a/>

短い話の集会所

2010年10月24日13時28分発行